

夫婦関係分析におけるダイアド・データ活用の可能性

○西野理子（東洋大学）

1. 報告の目的

本報告では、夫婦関係の分析に限定し、ダイアド・データを用いた場合の分析の有効性を検討する。

家族研究でダイアド・データ（ペア・データ）の活用といえば、夫婦関係が真っ先に思い浮かぶ。夫婦関係の満足度やコミュニケーションの頻度、あるいは家事の頻度など、同じ質問が夫と妻相互にたずねられ、両者の回答を用いた分析を目にすることは多い。ダイアド関係を分析する際、個人が認知している関係性の情報だけでなく、相手が認知している関係性の情報も得られれば、ダイアド関係の分析に有益であることは言うまでもない。これらの情報は、個人がどのようなダイアド関係を築いているかを把握するのにつかわれる場合もあれば（たとえば、夫婦間の満足度のズレを加えて個人の夫婦関係満足度を把握する、家事頻度を相手の回答により補正する、個人のコミュニケーション頻度として二者双方の回答を加算した数値を使う、など）、個人ではなくダイアド関係そのものの把握につかわれる場合（たとえば、夫婦関係満足度の二者間のパターンを把握する、ズレの度合いを変数化する、など）もある。さらに近年では、マルチレベル分析の手法を適用することにより、ダイアド・データの非独立性を可視化しながら関係性の分析も試みられている。

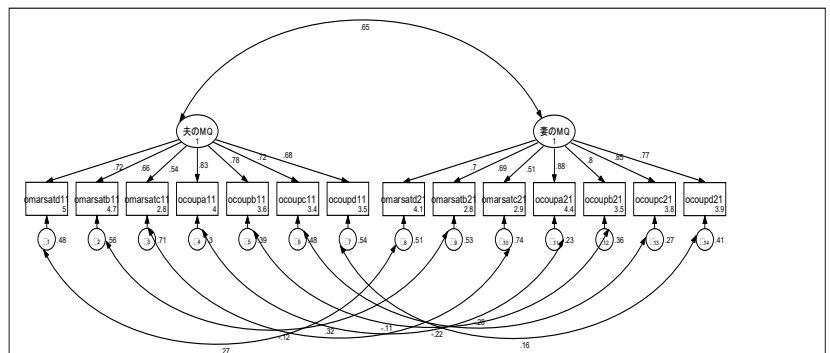
2. 夫婦関係の分析モデルにおける課題

一方で、夫婦関係を実証的にとらえる方法は、多々工夫されてきている。関係満足度や情緒的な認知、相手への評価などの心理的な側面からとらえられることもあれば、コミュニケーションや共同行動などの行動的側面がとらえられることもある。あるいは、伴侶性や自己開示という概念に置き換えている研究もある。いわゆる「結婚の質」と総称されることが多いが、「結婚の質」は多面的な概念であり、理論的な整合性が整えられているとはいえない。そこで本報告では、実証的に「結婚の質」を検討する道を試みる。

「結婚の質」を把握するとすれば、①満足度などのなんらかの指標で代替したモデル、②満足度や情緒的認知など複数の指標を合成したモデル、③「結婚の質」をいう潜在概念を上位に想定したモデル、が考えられる。本報告では、潜在概念を想定したモデルの導入を試みる。モデル構築にあたって、個人レベルで「結婚の質」という潜在概念を配置したモデルと、ダイアドレベルで「結婚の質」という潜在概念を配置したモデルの違いを、実証的に検討したい。

用いるデータは、東京大学社会科学研究所が行っている「高校卒業後の生活と意識に関する調査（高卒パネル調査）」のなかの夫婦調査の第1波である。同じ質問が夫と妻双方にたずねられた形式で、データがえられている。

大会当日の報告では、実際のデータを用いた結果を示して、セッション参加者との議論を展開したい。



(キーワード：夫婦関係、ダイアド・データ、SEM)